

には霞ヶ浦の水質を研究している人、それぞれが、霞ヶ浦の改善対策をあれこれ考えたりしているが、それぞれがひとつひとつの「点」であって、一本の「線」になるように引こうとするには、何かが足りないという感じがぬぐい去れなかった。これを強靱な線とし、さらに大きな実りとする何かを早急に探しあてなければならぬのではないか。

(主婦)

桜川とその附近の史蹟を探る(第七回)

永 山 正

今は新治村に含まれているが、山の荘(小野、小高、東城寺、本郷、永井、大志戸、今泉、沢辺、小山崎の九ヶ村を含む)は古く開けたところで史蹟も多い。山の荘という地名から見ると、恐らくどこかの荘園で或は比叡山延暦寺の荘園だったかもしれない。そのためかこの地方には早くから都の文化が移植されていた。次に主な史蹟を道順に訪ねてみることにしよう。

(1) 頭白上人建立の大五輪塔 新治村小高にある。果内層塔の大きなもので永正十二年(四百六十年程前)二

月三日に頭白上人が母の冥福を祈って建立したもので碑の正面に「功德主頭白上人」下に小さく永正十二年二月三日と刻まれている。頭白上人については面白い伝説が伝えられている。簡単にその梗概を述べてみよう。

話しは今から四百何十年か前にさかのぼるが本郷(新治村)にどこからか流れてきて住みついた福田盛行と名乗るものが居た。彼の妻シノは妊娠中にもかかわらず家出した夫盛行のゆくえを尋ねてこの附近にさしかかった。この附近に巣くっていた山賊、左源次は折しも通りかかったシノに飛びつき彼女を殺して大金を奪って死体の上をかやでおおいかぶせて帰宅し、その妻にいちぶしじゅうを物語ったところ彼以上にむごい性質をもった彼の妻は、これほどの大金を持っている者ならば立派なもちものがあるだろうと不甲斐ない夫の仕打ちを憤慨して、さらに死体を探りに家を出たのである。その後で夫左源次は鬼にも等しい妻の行為をいたく悲しみ死者の冥福を祈るため一念発起して六部(巡礼)となり諸国を巡廻した。

一方、左源次のためあたら命をなくしたシノは、その時一人の男の子を産みおとした。刺された傷口から出たのだとも言われている。彼女は亡霊となっても赤児を育てようと毎晩小田のだんごやに行き、だんごを六文づつ買って来た。だんごやのおやじさんとお婆さんは毎日毎